

北海道の高校生におけるひきこもり親和性とその関連要因

－性別での検討－

A study on related factors of with hikikomori affinity in high school students in
Hokkaido - Examination by gender -

米田政葉(北海道医療大学大学院看護福祉学研究科博士課程)

志渡晃一(北海道医療大学大学院看護福祉学研究科)

要旨：

ひきこもり予防に向けた示唆を得ることを目的に、北海道の高校生におけるひきこもり親和性とその関連要因について性別で検討した。調査対象は北海道内の高校1校に所属する生徒951名であり864名(有効回答率95.4%)を分析対象とした。ひきこもり親和性を目的変数、生活習慣、過去の学校・家庭での経験、過去の父母との関係を説明変数とし性別にFisherの直接確率検定、ロジスティック回帰分析(ステップワイズ法・年齢で調整)にて関連を検討した。親和群は、全体13.5%、男性12.2%、女性14.4%で有意差は見られなかった。親和群は男女共に生活習慣に乱れが見られる。また、男女共に過去の学校・家庭での経験や父母との関係に課題を抱えており、特に女性についてこれらの影響が大きい可能性が示唆されたと考える。有効性は、1校ではあるが全数調査を行い親和性と関連要因を検討したことである。今後、例数を増すと共に他の要因について検討することが課題である。

keyword：ひきこもり親和性 高校生 生活習慣 父母との関係 性別

I. 緒言

近年、ひきこもり予防の視点からひきこもり親和群(以下、親和群)に注目が集まっている。親和群とは、「ひきこもり群と似た心理的側面を有しながらも、ひきこもり状態にならずにとどまっている存在」であり、ひきこもり予備軍的存在として指摘されている(東京都, 2008; 内閣府, 2010)。ひきこもり親和性(以下、親和性)を測定する尺度により推定される。親和群の特徴について東京都(2008)及び内閣府(2010)は女性や若い層に多くみられること、過去にいじめをはじめとする学校における諸課題や、家庭内における諸課題を経験していることを指摘している。

また、渡辺・松井・高塚(2010)は東京都の調査におけるデータの分析を行いその特徴について、うつ・罪悪感などの精神症状を抱えること、自分の意見に対する評価や批判を避けていることであると推測している。また、合わせて親和群に対するケアについても充実化し、ひきこもりに至る前段階での介入方

法を探索する必要があると指摘している。米田・志渡(2016a)が内閣府の調査データを二次解析し、関連要因について、男性では学校生活における友人関係や、家庭における社会性に関連する要因、女性については学校生活全般や家族との情緒的繋がりが影響する可能性を示唆している。

志渡・上原・佐藤ほか(2013)、米田・志渡(2015; 2016b)、米田(2016)が保健医療福祉系学生を対象に行った一連の研究の結果、「生活習慣が不良であり、抑うつ傾向が高く、首尾一貫感覚(Sense of coherence: 以下、SOCとする)が低いこと」が示されている。過去の学校での経験について、「男性は友人関係に関する要因、女性は学生生活全般の影響が大きいこと」を指摘している。また、過去の家庭での経験について、「男性では社会性に関する要因、女性では家族機能が不全傾向にあった可能性」が示唆されている。また、大学生全般に行った研究でも保健医療福祉系と同様の結果がみられたほか、過去の両親

【調査報告】

との関係について父母別で関連要因が異なる可能性が示唆されている(米田・奥田・志渡, 2017). さらに米田・志渡(2018)は高校生を対象とし同様の研究を行い, 親和群について, 睡眠を中心とした生活リズムが乱れている事, 過去に学校や家庭においてストレスフルな経験をしていると述べている. 先行研究(米田・志渡, 2016a; 米田, 2016)において, 性別で関連要因に差があることが指摘されており, これについて高校生でも同様のことが言えると考え.

しかし, これまで高校生を対象とした親和性に関する研究について性別で要因を検討したものはみられない. 親和性とその関連要因について高校生を対象に性別での検討を行うことで, 性別による要因の違いを考慮した, より早期からのひきこもり予防方法の考案に向けた知見を得ることができると考える.

そこで本研究では, 北海道内の高校生における, ひきこもり親和性とライフスタイル, 過去の学校・家庭での経験, 過去の父母との関係について性別での検討を行い, ひきこもり予防に向けた示唆を得ることを目的とした.

II. 方法

1) 調査期間・対象・方法

北海道内の公立高校1校に所属する高校生951名を対象とし2016年8月に無記名自記式質問紙を用いた集合調査を行った. なお, 対象高校は石狩管内の進学校である. 回収数905名(回収率95.2%), 有効回答数864名(有効回答率95.4%)であった.

2) 調査項目

調査項目は1)基本属性4項目, 2)ひきこもり親和性4項目, 3)日常生活習慣11項目, 4)過去の学校での経験9項目, 5)過去の家庭での経験11項目, 6)過去の家庭での経験10項目, 7)母親との関係10項目, 8)父親との関係10項目, 9) The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale(米国国立精神保健研究所疫学的抑うつ尺度; 以下 CES-D) 日本語版20項目, 10)SOC 日本語版13項目の計102項目とした.

3) 分類方法

ひきこもり親和性は4件法4項目で構成される尺度であり, すべての項目について得点を逆転処理したのち合計点を算出した. 合計点数は4~16点に分布し, 先行研究にのっとり, 4~14点を一般群, 15~16点を親和群と定義した.

CES-Dは, 4件法20項目であり, うつ気分(7項目), 身体症状(7項目), 対人関係(2項目), ポジティブ項目(4項目)の4つの下位尺度から構成される. ポジティブ項目についてはすべて逆転処理を行った後, 他の3項目との合計得点を算出した. 得点は0~60点までに分布し, 16点未満に該当する群を「低うつ群」, 16点以上に該当する群を「抑うつ群」と定義した.

SOCは7件法13項目から構成される尺度であり, 各項目に1点から7点を配点し既定の方法で合計点を算出した. 合計点数は13~91点であり, 13~45点を低値群, 46~59点を中値群, 60~91点を高値群とした.

4) 分析方法

性別に, ひきこもり親和性を目的変数, 他の変数を説明変数とし単変量解析として Fisher の直接確率, 多変量解析としてロジスティック回帰分析(強制投入法, 年齢で調整)にて関連を検討した. なお, 統計的有意水準は両側検定で5%未満とした.

5) 倫理的配慮

本研究は対象が高校生であることから, 当該高校の学校長の同意を得て行った. また, 調査票の配布・回収は, 各クラスの担任に依頼した. 配布時に1) 結果の公表に当たり, 統計的に処理し個人を特定されることはない. 2) 調査によって得られたデータは, 研究以外の目的で使用しない. 3) 調査に参加しないことで不利益を被ることはなく, かつ途中での同意撤回を認めるという条件について口頭及び書面にて説明してもらい, 同意の得られたもののみを対象とした. 収集後の調査票についてクラスごとに封筒に

【調査報告】

入れ集約したのち、郵送にて回収した。なお、北海道医療大学看護福祉学部・看護福祉学研究科倫理委員会の承認を得て行った研究である(承認番号 16N 033035)。

III. 結果

1) 基本属性

対象集団の基本属性について、性別は男性 353 名(40.4%)、女性 514 名(58.8%)、学年は 1 年生 295 名(36.5%)、2 年生 268 名(33.2%)、3 年生 245 名(30.3%)であった。平均年齢は 16.4±1.0 歳であった。

2) ひきこもり親和性の分布

親和群の該当率は全体 13.5%、男性 12.2%、女性 14.4%であり有意差は見られなかった。

3) ひきこもり親和性とライフスタイル・CES-D・SOC の関連

表 1 に性別におけるひきこもり親和性とライフスタイル・CES-D・SOC の関係について示した。男性について単変量解析の結果、一般群と比較し親和群で該当率が有意に低かった項目は「現在健康である」

みが人より多いと感じる」「SOC 高値群」の 3 項目であった。

女性について単変量解析の結果、一般群と比較し親和群で該当率の低かった項目は、「現在健康である」「朝、決まった時間に起きられる」「平均睡眠時間(6~8 時間)」「普段朝食を食べる」「趣味がある」「SOC 高値群」の 6 項目であり、該当率の高かった項目は、「深夜まで起きていることが多い」「昼夜逆転の生活をしている」「栄養バランスを考える」「悩みが人より多いと感じる」「CES-D 高値群」の 5 項目であった(表 1)。また、多変量解析の結果、独立した関連の見られた項目は、「CES-D 高値群」「普段朝食を食べる」「悩みが人より多いと感じる」「深夜まで起きていることが多い」の 4 項目であった。

4) ひきこもり親和性と過去の学校での経験の関連

表 2 にひきこもり親和性と過去の学校での経験の関連について示した。男性について単変量解析の結果一般群と比較し親和群で該当率の高かった項目は、「一人で遊んでいる方が楽しかった」「我慢をすることが多かった」の 2 項目であり、該当率の低かった項目はみられなかった。多変量解析の結果独立した

表 1. ひきこもり親和性と生活習慣・CES-D・SOC の関連

	男性				女性				n(%)
	一般群	親和群	p1	p2	一般群	親和群	p1	p2	
現在健康である	294 (94.8)	43 (100)	*		419 (95.2)	63 (85.1)	*		
1回30分以上の汗をかく運動を週2回以上、1年以上実施している	232 (75.3)	29 (67.4)			261 (59.3)	35 (47.3)			
朝、決まった時間に起きられる	259 (83.5)	29 (67.4)	*		360 (81.8)	48 (64.9)	*		
深夜まで起きていることが多い	207 (66.8)	33 (76.7)			283 (64.3)	61 (82.4)	*	§	
昼夜逆転の生活をしている	36 (11.7)	10 (23.3)	*		50 (11.4)	20 (27.0)	*		
平均睡眠時間(6~8時間)	153 (49.5)	16 (37.2)			183 (41.6)	21 (28.4)	*		
普段朝食を食べる	273 (88.1)	37 (86.0)			391 (88.9)	57 (77.0)	*	§	
栄養バランスを考える	231 (74.5)	20 (46.5)	*	§	310 (70.5)	43 (58.1)	*		
悩みが人より多いと感じる	14 (4.6)	9 (21.4)	*	§	28 (6.4)	16 (21.6)	*	§	
趣味がある	297 (97.1)	39 (90.7)			424 (96.4)	67 (90.5)	*		
ダイエットをしている	28 (9.0)	3 (7.0)			174 (39.5)	34 (45.9)			
CES-D高値群	132 (45.4)	31 (73.8)	*		192 (43.6)	61 (82.4)	*	§	
SOC高値群	92 (31.0)	2 (4.8)	*	§	130 (29.5)	6 (8.1)	*		

*: p<0.05 by Fisherの直接確率検定

§ :ロジスティック回帰分析(ステップワイズ法、年齢で調整)

「朝、決まった時間に起きられる」「栄養バランスを考える」「SOC 高値群」の 4 項目であり、該当率が高かった項目は、「昼夜逆転の生活をしている」「悩みが人より多いと感じる」「CES-D 高値群」の 3 項目であった(表 1)。また、多変量解析の結果独立した関連が見られた項目は、「栄養バランスを考える」「悩

関連の見られた項目は、「我慢をすることが多かった」1 項目であった。女性について単変量解析の結果、一般群と比較し親和群で該当率の高かった項目は、「一人で遊んでいる方が楽しかった」「不登校を経験した」「いじめを見て見ぬふりをした」「我慢をすることが多かった」「学校の勉強についていけなかった」

【調査報告】

表2. ひきこもり親和性と過去の学校での経験 n(%)

	男性				女性			
	一般群	親和群	p1	p2	一般群	親和群	p1	p2
	310 (100)	43 (100)			440 (100)	74 (100)		
友達とよく話した	296 (95.5)	39 (90.7)			432 (98.2)	73 (98.6)		
親友がいた	264 (85.2)	32 (74.4)			396 (90.0)	65 (87.8)		
一人で遊んでいる方が楽しかった	76 (24.5)	19 (44.2)	*		81 (18.5)	33 (44.6)	*	§
不登校を経験した	7 (2.3)	2 (4.7)			5 (1.1)	8 (10.8)	*	§
友達をいじめた	23 (7.4)	6 (14.0)			8 (1.8)	3 (4.1)		
友達にいじめられた	24 (7.7)	4 (9.3)			34 (7.7)	8 (10.8)		
いじめを見て見ぬふりをした	38 (12.3)	6 (14.0)			32 (7.3)	12 (16.2)	*	
我慢をすることが多かった	78 (25.2)	22 (51.2)	*	§	140 (31.8)	48 (64.9)	*	§
学校の勉強についていけなかった	79 (25.5)	12 (27.9)			156 (35.5)	43 (58.1)	*	
先生との関係がうまくいかなかった	44 (14.2)	11 (25.6)			61 (13.9)	28 (37.8)	*	§

*: p<0.05 by Fisherの直接確率検定

§ : ロジスティック回帰分析(ステップワイズ法, 年齢で調整)

「先生との関係がうまくいかなかった」の6項目で
あり、該当率の低かった項目はみられなかった。多
変量解析の結果独立した関連が見られた項目は、「一

低かった項目は見られなかった。多変量解析の結果、
独立した関連が見られた項目は、「自分で決めて家族
に相談する事はなかった」「我慢をすることが多かつ

表3. ひきこもり親和性と過去の家庭での経験の関連 n(%)

	男性				女性			
	一般群	親和群	p1	p2	一般群	親和群	p1	p2
	409 (100)	43 (100)			440 (100)	74 (100)		
自分で決めて家族に相談する事はなかった	53 (13.0)	13 (30.2)			46 (10.5)	22 (29.7)	*	§
家族に相談しても役に立たなかった	51 (12.5)	12 (27.9)			75 (17.0)	25 (33.8)	*	
小さい頃から習い事に参加していた	231 (56.5)	31 (72.1)			325 (73.9)	50 (67.6)		
両親の関係がよくなかった	31 (7.6)	5 (11.6)			46 (10.5)	17 (23.0)	*	
引越しや転校をした	90 (22.0)	16 (37.2)			150 (34.1)	31 (41.9)		
大きな病気をした	15 (3.7)	0 (0.0)			22 (5.0)	7 (9.5)		
両親が離婚した	30 (7.3)	2 (4.7)			47 (10.7)	12 (16.2)		
経済的に苦しい生活を送った	11 (2.7)	2 (4.7)			23 (5.2)	7 (9.5)		
我慢をすることが多かった	36 (8.8)	12 (27.9)	*	§	71 (16.1)	31 (41.9)	*	§

*: p<0.05 by Fisherの直接確率検定

§ : ロジスティック回帰分析(ステップワイズ法, 年齢で調整)

一人で遊んでいる方が楽しかった」「不登校を経験した」

た」の2項目であった。

「我慢をすることが多かった」「先生との関係がうまく
いかなかった」の4項目であった。

5) ひきこもり親和性と過去の家庭での経験の関連

表3に親和性と過去の家庭での経験の関連を示した。
男性について単変量解析の結果、一般群と比較
し親和群で該当率の高かった項目は、「我慢をすること
が多かった」の1項目であり、該当率の低い項目
はみられなかった。多変量解析の結果独立した関連
が見られた項目は、「我慢をすることが多かった」の
1項目であった。

女性について単変量解析の結果、一般群と比較し
親和群で該当率の高かった項目は「自分で決めて家
族に相談する事はなかった」「家族に相談しても役に
立たなかった」「両親の関係がよくなかった」「我慢
をすることが多かった」の4項目であり、該当率の

6) ひきこもり親和性と過去の母親との関係の関連

表4にひきこもり親和性と過去の母親との関係の
関連について示した。男性について、単変量解析の
結果、一般群と比較し親和群で該当率の高かった
項目は、「母親が過干渉であった」の1項目であり、
該当率の低かった項目は見られなかった。多変量解
析の結果、独立した関連が見られた項目は、「母親が
過干渉であった」の1項目であった。

女性について単変量解析の結果、一般群と比較し
該当率の低かった項目は「母親とは何でも話すこと
ができた」の1項目であり、該当率の高かった項目
は、「母親は学校の成績を重視していた」「母親が過
保護であった」「母親が過干渉であった」の3項目で
あった。また、多変量解析の結果独立した関連が見
られた項目は、「母親が過保護であった」「母親が過

【調査報告】

干渉であった」の2項目であった。

IV. 考察

本研究の結果、ひきこもり親和群の該当率は全体で13.5%であり、大学生を対象とした研究(志渡・上

7) ひきこもり親和性と過去の父親との関係の関連

表4. ひきこもり親和性と母親との関係の関連 n(%)

	男性		p1	p2	女性		p1	p2
	一般群	親和群			一般群	親和群		
母親とは何でも話すことができた	310 (100)	43 (100)			440 (100)	74 (100)		
母親はしつげが厳しかった	126 (40.6)	14 (32.6)			262 (59.5)	33 (44.6)	*	
困った時母親は身に助言してくれた	21 (6.8)	4 (9.3)			36 (8.2)	11 (14.9)		
将来の職業などを母親に決められた	135 (43.5)	13 (30.2)			261 (59.3)	35 (47.3)		
母親と自分との関係がよくなかった	3 (1.0)	1 (2.3)			5 (1.1)	3 (4.1)		
母親は学校の成績を重視していた	23 (7.4)	4 (9.3)			39 (8.9)	12 (16.2)		
母親と死別した	63 (20.3)	12 (27.9)			67 (15.2)	20 (27.0)	*	
母親から虐待を受けた	1 (0.3)	0 (0.0)			2 (0.5)	0 (0.0)		
母親が過保護であった	0 (0.0)	1 (2.3)			2 (0.5)	1 (1.4)		
母親が過干渉であった	21 (6.8)	6 (14.0)			25 (5.7)	13 (17.6)	*	§
母親が過干渉であった	9 (2.9)	7 (16.3)	*	§	8 (1.8)	9 (12.2)	*	§

*: p<0.05 by Fisherの直接確率検定

§ : ロジスティック回帰分析(ステップワイズ法, 年齢で調整)

表5. ひきこもり親和性と父親との関係の関連 n(%)

	男性		p1	p2	女性		p1	p2
	一般群	親和群			一般群	親和群		
父親とは何でも話すことができた	310 (100)	43 (100)			440 (100)	74 (100)		
父親はしつげが厳しかった	101 (32.6)	11 (25.6)			135 (30.7)	12 (16.2)	*	§
困った時父親は親身に助言してくれた	21 (6.8)	6 (14.0)			29 (6.6)	8 (10.8)		
父親と自分との関係がよくなかった	115 (37.1)	13 (30.2)			159 (36.1)	16 (21.6)	*	
将来の職業などを父親に決められた	8 (2.6)	3 (7.0)			31 (7.0)	10 (13.5)		
父親は学校の成績を重視していた	2 (0.6)	0 (0.0)			6 (1.4)	1 (1.4)		
父親と死別した	27 (8.7)	11 (25.6)	*	§	41 (9.3)	14 (18.9)	*	
父親から虐待を受けた	4 (1.3)	0 (0.0)			7 (1.6)	2 (2.7)		
父親が過保護であった	1 (0.3)	0 (0.0)			1 (0.2)	1 (1.4)		
父親が過干渉であった	6 (1.9)	1 (2.3)			14 (3.2)	9 (12.2)	*	§
父親が過干渉であった	2 (0.6)	1 (2.3)			4 (0.9)	2 (2.7)		

*: p<0.05 by Fisherの直接確率検定

§ : ロジスティック回帰分析(ステップワイズ法, 年齢で調整)

表5にひきこもり親和性と過去の父親との関係の関連について示した。男性について、単変量解析の結果、一般群と比較し親和群で該当率の高かった項目は、「父親は学校の成績を重視していた」の1項目であり、該当率の低かった項目は見られなかった。多変量解析の結果、独立した関連が見られた項目は、「父親は学校の成績を重視していた」の1項目であった。

女性について一般群と比較し親和群で該当率の低かった項目は、「父親とは何でも話すことが出来た」「困ったとき父親は親身に助言してくれた」の2項目であり、該当率の高かった項目は「父親は学校の成績を重視していた」「父親が過保護であった」の2項目であった。また、多変量解析の結果独立した関連が見られた項目は、「父親とは何でも話すことが出来た」「父親が過保護であった」の2項目であった。

原・佐藤ほか, 2013 ; 米田・志渡, 2015 ; 2016b ; 米田・志渡・奥田, 2017)と同様の結果であった。また、性別にみると男性12.2%, 女性14.4%であり有意差がみられなかった。これについても大学生を対象とした研究(志渡・上原・佐藤ほか, 2013 ; 米田・志渡, 2015 ; 2016b ; 米田・奥田・志渡, 2017)を支持する結果であった。一方、東京都(2008)及び内閣府(2010)の調査では女性の該当率が有意に多いという結果が得られておりこれと異なっていた。このことから、若年層について、性別に関係なく比較的親和性が高い可能性が示されたと考える。

親和群のライフスタイルに関する特徴について、男性では主観的健康感が低く、昼夜逆転の生活をしており、朝決まった時間に起きられず、普段からあまり栄養バランスを考えた食事をとっておらず、悩みが人より多いと感じていた。女性について、男性とおおむね同様の結果が得られており、さらに、趣

【調査報告】

味がなく、普段朝食を食べておらず、平均睡眠時間が6時間未満あるいは8時間を超過していた。また、男女ともに親和群は、抑うつ傾向が高く、首尾一貫感覚が低かった。また、これについて米田・志渡(2016b)の結果を支持する結果であった。さらに、男性について先行研究(米田・志渡,2016b)では関連の見られていなかった、栄養バランスを考えた食事をとっているかなどの要因との関連などがみられており、今後年代別でのライフスタイルの特徴について加味した検討が必要になると考える。

過去の学校での経験について男性の親和群は総じて、一人で遊んでいる方が楽しかった、我慢をすることが多かったと感じていた。女性の親和群については、不登校の経験やいじめを見て見ぬふりをした経験があり、一人で遊んでいる方が楽しかったと感じていた。また、学校の勉強についていけなかった、先生との関係がうまくいかなかったと感じていた。これらの結果は概ね先行研究(米田・志渡, 2016a, 米田, 2016)と同様の結果であったと考える。

過去の家庭での経験について男性の親和群は、我慢をすることが多かったと感じていた。女性については、自分で決めて家族に相談する事はなかった、家族に相談しても役に立たなかったと感じており、さらに、両親の関係がよくなかった、我慢をすることが多かったとも感じていた。これらの結果は概ね先行研究(米田, 2016)を支持する結果であった。

過去の母親との関係について男性の親和群は総じて、母親が過干渉であったと感じていた。女性の親和群では、母親とは何でも話すことが出来たと感じていなかった。一方で、母親が過保護であった、母親が過干渉であったとも感じていた。さらに、母親は学校の成績を重視していたと感じていた。

ひきこもり親和性と過去の父親との関係について男性の親和群の特徴として、父親は学校の成績を重視していたと感じていた。また、女性の親和群については、父親とは何でも話すことが出来た、困ったとき父親は親身に助言してくれたとは感じていなかった。一方、父親は学校の成績を重視していた、父親が過保護であったと感じていた。これらの結果か

ら男性と比べ女性では母親のみならず、父親からの影響も大きい可能性が示唆されたと考える。

有効性は、先行研究で行われていない高校生における親和性とその関連要因の性別における検討を行い、早期段階からのひきこもり予防に向けた示唆を得たこと、1校のみではあるが全数調査を行ったことである。限界として、横断研究であり因果関係の推定までは困難であること、北海道内の1高校のみが対象であることがあげられる。今後、さらに対象となる高校数を増やすと共に他の要因についても検討を行うこと、過去の経験について小中高等学校のいずれの段階でのエピソードかについて検討を行うことが課題である。

引用文献

- 内閣府(2010)「若者の意識に関する調査(ひきこもりに関する実態調査)」(http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf_index.html, 2010.12.25)
- 志渡晃一・上原尚紘・佐藤巖光・ほか(2013)「高等教育機関に所属する学生のひきこもり親和性と抑うつ症状、SOCの関連」『北海道医療大学看護福祉学部学会誌』9(1), 121-124
- 東京都(2008)「実態調査から見る若者のこころ」(http://www.seisyounen-chian.metro.tokyo.jp/seisyounen/pdf/seisyounen/pdf/14_jyakunen/jitaihoukokusyo.pdf, 2009.10.1)
- 渡部麻美・松井豊・高塚 雄介(2010)「ひきこもりおよびひきこもり親和性を規定する要因の検討」、『心理学研究』81(5), 478-484
- 米田政葉・志渡晃一(2015)「ひきこもり親和性に関する検討」『北海道医療大学看護福祉学部学会誌』11(1), 43-47
- 米田政葉(2016)「高等教育機関に所属する学生のひきこもり予防」北海道医療大学大学院看護福祉学研究科修士論文。
- 米田政葉, 志渡晃一(2016a)「ひきこもり親和性の関連要因に関する性別での検討」『北海道社会福祉学研究』36, 31-37. -若者の意識に関する(ひきこ

【調査報告】

もり実態調査)の二次分析よりー

米田政葉・志渡晃一(2016b)「保健医療福祉系学生におけるひきこもり親和性とライフスタイル、CES-D、SOC に関する性別での検討」『北海道医療大学看護福祉学部学会誌』12(1), 49-52.

米田政葉・奥田かおり・志渡晃一(2017)「北海道内の高等教育機関に所属する新入学生のひきこもり親和性とその関連要因の検討」『北海道医療大学看護福祉学部学会誌』13(1), 3-8.

米田政葉・志渡晃一(2018)「北海道内の高校生におけるひきこもり親和性とその関連要因に関する検討」『日本社会医学研究』38(1), 29-36.